
ドール

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドール

【著者名】

タンポポ

N3514B

【あらすじ】

失恋をした青年、一樹^{かずき}は、生きる希望を失った。そんな時、不思議な店で不思議な人形と出会った事で一樹の人生は大きく変わる恋愛ファンタジー。私自信の実話を少しいじつて書いてみました。

第1話～悲しみも秘密…それがあなたの鏡～

相変わらずこの街は賑やかな所だな。

こんな昼間つから制服を着て街中を歩いてたって特に目立たない。

たまに今時の若者は…！

なんて陰口がコソコソと聞こえてくる。

まあ当然だ、今は確かに平日の昼間、学生なら授業を受けている時
間帯なのだが、俺は煙草を吸いながら街の中をフラフラと歩いていた。

別に学校が嫌いとかイジメられたとかそんなんじゃない。イジメなんかとは昔から無縁だった。

むしろ学校は好きな方だし友達だって親友と呼べる奴がたくさんいるくらいだ。

じゃあなぜって…？

失恋したんだよ…。凄い好きだった、もしかしたら向こういつも俺に気
があるんじゃないかななんて思っていた。

でもそれは俺の勘違いだったみたいで、そいつには彼氏ができるや
つたみたいなんだ。

それでどうでも良くなった。

学校だつて、過去も未来も、今の自分だつて…。

生きていく上では必ず辛い事なんかいくらでもある。人間には『自由』なんかないんだ。もし自由な奴がいる…いや、居たのだったらそいつは牢屋の中とかにいるんだろうな。もしくは世間のはみ出しが者だ。

社会のルールを守れず好き勝手やつたんだろう。仕事もせずに外に出すに…『自由』に行き着いた奴に待っているのは『孤独』。二人揃えば意見の違いから自由じゃなくなるって事だ。

だからこそ人間は支えられて生きている。親、友達、夢、金、恋人
…。

高校生なんて所詮まだ餓鬼であつて親に食わせてもらつている。小遣い稼ぎに始めたバイトと堅苦しい学校は辛い。

そんな時に支えが救つてくれるはず。今までの俺なら、あいつの返事を待つ。そう考えるだけで不思議と頑張れた。

でも今はもうそれがない。これが失恋なんだ。

自殺したい奴なんて馬鹿だと思つていたけど、今はその気持ちがなんとなく分かる気がした。

歩いているのに歩いている感覚がない。

呼吸をしているかどうかさえ定かではなくつっていた。

でも、こんな悲しさを人に言えないのが俺の損な性格。

言つた所で何も解決しないし、大切な友達だからこそ心配をかけたくない。

結局、最後に解決させるのは自分自身なのだ。

だから俺は秘密にしてきた。

そんな時、目に止まつた店があつた。

他の店はオシャレな飾りや雰囲気で、流行りを手に入れているのに対して、なんだこの店は？

センスも感じられないボロボロな店。こんな店がこの街の中にあるってだけで浮いている。なぜ取り壊されないのかが不思議なくらいだ。

表の看板には、人からの次の文字がかすれて読めない。何を扱っているのかすら分からぬ店に客など来るだろうか？

しかし、なぜか俺は自然とその中に吸い込まれる様に店内に足を踏み入れた。

「ガラガツ…ガラガラ～

スライドさせるドアだつてまともに開いてくれず、途中で何かに引っ掛けた。ここまでボロなのかとため息が出る。

店内をパツと見回すと、壁には蜘蛛の巣、床にはホコリと酷いものがあつた。しかし、商品だけは綺麗だった。

むしろ綺麗すぎて目立つ。まるで目立ちたい奴の様に俺には見えた。
人…ではない、人形だ。無数も並ぶ様々な姿形の人形。この店は人
形屋だつた事が判明した。

『「つざつてえ…』

ポロツと本音が零れた。それもそのはず、先ほどまでの（無）の感
情より（怒）の感情が溢れていた。

「何がありましたかな？」

声の主は年老いた老人。
すぐ目の前からしたが、人の気配なんて微塵も感じなかつた。

『「い、いや…』

失礼と知りながらも驚いてしまつた。

なにせヨボヨボのしいさんが不気味に笑つてゐるんだ。無理もない。

「青年、名は何と申す？」

『「一樹……間嶺一樹だ』

なんで初来店の、何も買つてない客の俺がいきなりこんなじいさん
に名前を教えないぢやいけないんだ？

つて思つたけどなぜかこの老人には不思議なオーラがあつて…いつ
の間にかペースに乗せられているような気分になつてしまつ。

「随分と溜まつた怒り。いや、これは悲しさの方かな？…お前さんにピッタリの物があるぞい？」

そう言つて老人が人差し指を向けた方を見ると、やはり人形が置いてあった。

しかし、この人形には他の人形とどこか違う雰囲気があった。

まるで自分が一番だと言つ心の叫びが聞こえてきそつな程、メイクや髪を染めた人形に比べると、どこかおとなしい感じがする。

体長は30センチくらいだろうか。他の人形に比べれば明らかに一回り小さいサイズ。服装も姉のお下がりを着る妹の様な、古びた衣類。麦藁帽子を被つた黒い髪。

まあ、どこにでも売つていそうな…というより、売り残りそうな人形だった。

『じいさん、この人形がどうかしたのか？まさか、高校二年にもなつて…しかも男の俺に買えつて言うのか？』

皮肉たっぷりの口調で俺は老人に言つてのけた。

「ヒヒヒ…」

老人はまたしても不気味に笑い指差している。

その指先は人形の足元に向いていた。

『紙…？』

値段でも書いてあるのか？

と、手にとつて見てみるとそこには「」と書かれていた。

【悲しみも秘密。それが、あなたの鏡】

まさに今の俺に「」タリの言葉。それで余計に腹が立つた。

『「」よ……』

俺はそう言い放ち、その紙を勢いよく真つ二つに引き裂いた。
怒りを抑えられない俺は人形を抱えて店を飛び出した。代金など払
っていない。しかしそんな事が頭に回らないほど血が上っていた。

「」やつと見つけたのう。さて、これからあの青年と人形が
どうなるのか楽しみじゃよ……」

老人は一樹が走つていく背中を見送つて独り言を呴こぼし、闇の中に姿を消した。

第2話～ありえない謎～

『はあー…どうしよう、これ?』

俺は自分の部屋に戻って、ベッドに座り込んで冷静を取り戻した。それと同時に気付いた。

怒り狂つて暴れ回り、壁に空いた握りこぶし二つの穴。それを空けた時に使った右手の拳は皮が剥けヒリヒリと痛む。

そして無意識に持つてきてしまった人形。

別に壁に穴を空けた事に罪悪感はない。柄の良いバスタオルでも飾れば隠せる事だし、今日が初めてじゃないからだ。

問題はこの人形。やはり犯罪という言葉を考えるだけで少し怖い。そもそもなぜ怒っていた理由すら忘れた。怒りのせいで気付かない事は我に帰ると、どうも困る事ばかり。

『返しに行かなきや… まづいよね』

元々は結構几帳面な性格の俺は人形を店に返す事を決意した。

ふと時計の針に目をやると信じ難い事になっていた。

『もう12時…?』

外はすでに真っ暗で月と星が唯一光り輝く時間帯の夜になっていた。

明日も学校だし店も閉店しただろ？、返すのは明日で良いとしても
う寝るとするか。

俺は漫画は雑誌や、勉強には一切関係ない物を勉強机から乱暴に
退かし、その空いたスペースに大切に人形を置いた。まあ、傷でも
付けて弁償なんて、ゴメンだからな。

『…………おやすみ』

あれ、俺今なんて言った？

おやすみ？ 人形に？

馬鹿か俺は！ 返事なんて返つてくれるわけないのに。

はあ、今日はため息の多い日だな。頭が疲れた。俺はドサッと音を
たててベッドに倒れ込み、毛布に包まり今日一日の事を思い返した。
た眠れない夜だったみたいだ。

「おはよお……」

そろそろ寝ようと電気を消したが、部屋の明るさは大して変わらな
かった。それもそのはず、外では太陽の顔が出ている。どうやらま
た眠れない夜だったみたいだ。

……って、なんでお前がここにいる！？

『ハツ……なんだ夢か……』

いつの間にか俺は寝ていたようだ。こうこう夢を見た寝起きは最悪。疲れがとれるどころか増えてやがる。

それにもしても俺はまだあの子にフラれた事から立ち直れないなんて我ながら情けない。

なんて切ない朝なんだろう。しかし、そんな感情に浸りたいのに時計の針は進む事を辞めてくれない。刻一刻と遅刻までのタイムリミットが迫ってくる。

時刻は7時間30分。いつも家を出る時間だ。
電車の発車時刻は7時55分。高校には電車通学の俺にとって、朝は中学の頃より早い。

『やべ、遅刻する!』

慌ててリビングに下り、制服に着替え弁当とお茶しか入っていないスクール鞄を持つ。朝食はいつも食べないので大丈夫。髪形は長いが縮毛をかけ、髪を立てない俺にセットの時間などいらないのだ。

『おつと、朝の一服』

バタバタしながらもまた一階の浴室へ駆け上がる。
煙草に火を点け、部屋を出ようとしたらが、一時停止。

『今日の帰りに返すんだったな、学校持つてつちまうか』

例の人形を鞄に押し込んだ。元々弁当とお茶しか入っていないため、中はガラガラ。潰れたりする心配はない。

それより心配なのは友達に人形を持ち歩いているのがバレた時だ。恥ずかしくて仕方がないだろ？

つて、早く学校！ 電車に乗り遅れる！

『いってきますー。』

母親にあこがれを交わし5000の原チャにてまたがる。

「あら？ 今日は早い登校ね

窓から見送りに来た母親はなんと暢気な、こつちは切迫詰まつてんだよ！

『早くねえだろ！ ああ～ 煙草吸い終わんねえ！ あげるよ』

俺は母親に残りの煙草を手渡し、エンジンをかけアクセル全開で駆へと向かった。

途中、道路が混む事も信号に引っ掛かる事もなくスムーズに駅に付く事ができた。

『間に合つか… ってあれ？』

駅の中心の時計塔は7時30分を指していた。待てよ、それは俺が起きた時間だろ。

自宅から駅まで、最高時速が65キロの原チャで、いかにスムーズに来ようとも十分もかかる距離だ。

ありえないと思いながら、原チャを駐輪場に止め、携帯の時間を確認する。

『やつぱり7時50分じゃん!』

電車の発車時刻まであと5分。全力でホームまで走った。

『くそ!駅の時計が遅れるなっての!』

階段を上り改札を抜けさらに通路を爆走。この時ばかりは周りの目など気にしない。なにせ一時間に一本しか電車が通らないんだ。わずか一分の遅れがかなりのロスタイムになる。

『53分!ギリギリ間に合つ…』

否、間に合わなかつた。ホームに電車が止まつていない。乗り遅れたのだ。

息が切れ、努力が無駄になつた。

間に合つうと思ったのに間に合わなかつた。

両想いかと思つてたのに勘違いだつた。

昨日の今日でそう例えてしまつた俺はまた切ない気持ちになつた。

しかし、その時だつた。

次々と同じ電車で駅に向かう学校の制服を着た高校生がやつてきた。

みんな乗り遅れたのか？

しかし10分もすれば、いつもの朝の光景。

数多くの高校生が利用するこの電車のホームにはすぐに人込みができた。

やがて始点のこの駅に折り返しの電車がやってきて次々と乗り込む。

訳も分からぬ俺は立ち尽くしていた。

「よお一樹！まだ十月なのに寒いよなあ。早く電車乗るうづ

俺に声をかけてきたのは村中明宏。中学からの親友で同じ高校。クラスは違つてしまつたが、暇な時があればよく遊んだり相談したり、信用できる奴だった。

『なあ明宏、今何時だ？』

「えっと…7時50分だよ

明宏は携帯を見て答える。7時50分だと？俺の携帯はとっくに8時を回っている。

しかし現実はどうあがいても50分のようだ。ホツとした俺は携帯の時刻が狂つたのだろうと安心して電車に乗り込んだ。

安心したと同時に汗だくな事と喉の渴きに気付く。

俺は明宏に気付かれないようにソッと鞄を開け、中からお茶を取り出し、がぶ飲みした。夏場のこの状況で350ミリリットルの小さいペットボトルごときじや喉を潤すに足りなかつた。

最後の一滴を口に流し込み、車内に「」は捨てられないため再び鞄の中に戻した。

「待てよ？ 電源が切れようとも設定を変えない限り狂うことがない携帯の時刻が狂うのか？」

仮に狂つたとしてもほんの2、3分だろう。……ありえない。

その話題で明宏と話し合い、俺達は高校の最寄駅に着いた。結局は、ただの勘違いとして片付けた俺達だった。

今度は自転車に乗つて高校へ向かうために電車を下りる。床に置いた鞄を持ち上げると…冷たい？ 鞄が濡れていた。

『うわ、なんだよ』

俺は鞄の中身を素早く確認した。やばい、人形までビショビショに濡れている。これじゃ返しにいけないよ。

「さつき飲んでたお茶がこぼれたんだろ」「

俺が人形の入つた鞄の中身を隠しているから、状況が確認できない明宏が言った。

俺もそうだと思つ。お茶が零れたんだと思つ。

ただ…あの時まだ開けてないお茶を、俺は一滴も残さず飲み干していたはずななのだが…。

第3話／人形の眞実／

ありえない謎を疑問に思いながらも高校に着き、自分の教室に入る。濡れた鞄は大体は渴いたが、まだ湿っぽい。中身の弁当だけ取り出し、ベランダに干した。

「あ？ 誰の鞄だよ」

俺の鞄を見ながら一人の男が言った。どうも機嫌が悪いらしく今にも鞄を蹴りそうな勢いだ。

『俺のだ。触んな』

「おひ…一樹のか」

そいつは蹴り上げた足をピタリと止めた。

同じ年の世界にも上下関係というものは存在する。俺は、その格付けの上位に所属されるため誰も逆らわない。

俺は学校に着くなり弁当にガツついた。弁当は昼食。そんな法則を無視した俺の日課。やはり朝食抜きは辛いしね。もう高校生だし、中学生みたく決まった時間に…なんてない。

あつさりと平らげた弁当箱を床に置き、机に伏せる。ホームルームが始まる前に眠りに就いた。

この学校も適当なもので、挨拶の時に寝ていたら立つていかれか起こ

してもくれない。もはや諦められているのだろうが…。

成績も下の中くらいの俺が勉強もせずに楽に入れた高校だ。周囲もそんな奴ばかりだから全てが荒れている。一言でダメ高校だ。

授業中に起きている時間は携帯で暇を潰し、難無く学校が終わった。下校の時間になれば鞄は湯いでいた。しかし、鞄の中に入れた人形は日光を受けず湿っぽい。返しに行く事は不可能と見て、そのまま家に帰つた。

ベッドに横になると携帯が鳴つた。着信設定をしていない音。これはメルマガかとみた。

重い手なりでメールを見ると身に覚えのないアドレス…アド変でしたか。

送り主を見ると…え？

あ、あの娘からだ。俺に連絡先を教えるって事は、メールくらいしてもいいのだろうか？

いや、どうせまたフラれるんだ。もう傷つきたくない。臆病な俺にそんな勇気など…それに今更なんてメールすりやいいんだよ。

なんて考えながら、ふと画面を見る。

《メール送信OK》

・・・。

ざけんなあ！ 指が勝手に動きやがったあ！

お、俺はなんて送つちまつたんだ？

慌てて送信BOXを確認すると

『彼氏とは良い感じ?』

当たり前だらう……なんか、すっげー未練がましい内容だよ。なんでこんな事打つちま…

～ピコリコ、ピコ…

自分で驚く程のスピードで返信メールを開く。

『うん、すっごい幸せ』

はい、まあそうですよね。アドレスに彼氏の名前と付き合った記念日が書いてあるもんね。

俺つてば情けない…。
とりあえず泣くか。

～シクシク…グスン～

そうそう、ティッシュью一箱で足りるかな…って

『うわああああ！…』

俺は目の前の状況を見て、思わず叫んだ。なにせ、もはや定位位置と

なつた勉強机に置かれた人形が泣いていたからだ。

本当に…目から大粒の涙を流している。

人形が？泣く？

俺は疲れているのだろうか。どうすれば良いんだ？まさか友達に人形が泣いているんだけど、どうしよう？なんて言つたらそれこそ俺は変人扱いされるに違いない。

そうだ、あの店のじいさんなら、このからくりを知っているだろう。

俺は鞄の中に入形を入れ、家を飛び出した。乾いたばかりの鞄は再び濡れる運命になってしまった。

俺の愛車の原チャリで約10分、人形を買った店に着いた。

俺は店に入るなり

『じいさん、どこだあ！』

と、怒鳴り散らした。

「どうなさいました？」

すぐ背後から老人の声がして、思わず驚いてしまった。毎度毎度奇妙なじいさんだ。

『どうした？じゃないよ！この人形、泣いてるんだぞ！』

俺は鞄から人形を取り出し、老人に見せ付けた。幸い、まだ人形は泣いていた。これで冷やかしなど、思われない。抗議するに当たつて正当な理由になつた。

「確かに泣いてますね…それが何か？」

『惚けるなよ！何かじゃないだろ！涙を流す人形なんて怖くて部屋に置けるかよ！』

「その人形は主が勝手に持つて行つた物であろう?』

『…ぐつ』

「そういえば忘れてた。立場逆転…このままじゃ俺が悪者だ。

「それに、なぜ涙を流しているのか…解らぬのか?』

『…え?』

人形が泣く理由だと? そんなの、どうせ呪いの人形とか…靈的な事じやないのか?

『まさか、この人形に魂が込められているとでも言つのかい?』

「正解」と言いたい所じやが、まだ主は知らない方が良い。立ち去るがいい』

『ふざけんな！教えるよ！大体、魂が込められている人形なんて信じられるか！』

「仕方ない…その人形が泣いているのは主のせいじや。これ以上は自分で考える事じやな」

意味が分からぬ。俺のせいで人形が泣いているだと？少なくとも、この人形に怨みを買うような事は一切していないつもりだ。それどころか丁寧に扱っている。泣くところが礼があつても良いぐらいだろ。

「悲しみは秘密。それが、あなたの鏡」

そう言い残し、老人は店の奥に姿を消した。
その言葉が、この謎を解くヒントにでもなるのだろうか？

結局俺は人形を持つて帰つて來た。

机の上に置き、ジッと眺める。どうやら、まだ泣いている様だが段々と落ち着いてきたみたいだ。

『つたく…俺だつて色々辛くて泣きたいのによ…』

この人形を持つてきてからと言つもの、俺は泣いていない。不思議な事ばかり起きて泣く暇すらないのだ。

『代わりに人形が泣いてどうす…………ああーー』

まさか、いや…こんな事がりえるのか？

全ては俺のせいと老人は言った。

この人形は、俺の分を泣いてくれているのか？

そう考へると今までの事にも説明がつく。

まず、俺の見た夢。フラれたはずの彼女と付き合っている事を見た夢だ。

朝、現実に還つた俺は泣きそうだった。しかし、時計の針が遅刻ギリギリまで迫つていて、慌てていたから悲しみを忘れていた。

もしあの時にいつも通りの時間だつたら、大泣きのあまり、学校どころではない。

携帯の時刻が狂うなんて、この人形がやつたのか？

電車の中で鞄が濡れていたのは、お茶をこぼしたからではなく、あの時から既に人形は泣いていたんだ。

朝の俺の分を…人形は泣いていたんだ。

そして、たつた今。俺はあの子とのメールで泣きそうになった。

違つ：今まで泣きそうになつた、じゃなくて泣いていたんだ。

人形がいなかつたらこの涙は俺の目から流れていったんだ。

代わりに人形が泣いてくれていたんだ。

俺が悲しさを感じなかつたのは、忘れていたんじやなくて、人形が吸い取つてくれていたんだ。

信じられない…しかし、それ以外に説明の仕様がないじゃないか。

でも、俺のせいで人形が泣くのはあまりに可哀相だと思つ。

『ありがとう…でも、俺はもう泣かないよ。これから俺は強くなるよ。君の為に泣かない事にする。なんだって乗り越える』

俺は人形に深く誓った。

確かに、これから悲しい事なんて幾らでもあるわ。でも、それを含めて俺なんだ。

悲しみは忘れたくないんだ。

過去を忘れると言つ事は、今までの自分を忘ると言つ意味だから。

だけど、もう泣かない。

俺が不幸になればなるほど人形が不幸になるんじや…

俺はもう泣かないよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3514b/>

ドール

2010年10月9日22時41分発行